

令和4年6月21日

南の風特集号女子日本代表ワールドカップに向けてI

～ 恩塚ヘッドの目指すバスケットボール、就任からトルコ戦まで ～

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

特集を組みました。ワールドカップへ向けた女子日本代表の戦いを、恩塚ヘッドが掲げる目的、目標に沿って紹介していきます。恩塚ヘッドの就任のコメントから、トルコ戦までの戦いを振り返ります。

恩塚氏は女子日本代表ヘッドコーチ就任に当たって、『パリ五輪で金メダルを目指す』と宣言しました。まずパリ五輪の出場権を得るためには、『今秋のワールドカップ2022で優勝すること』、優勝が達成できなかった際には、2023年に開催される『女子アジアカップ』で、ベスト4以上の成績を収めて、OQT（オリンピック予選トーナメント）を獲得して、パリ五輪を目指すことになります。

恩塚ヘッドは『パリ五輪で金メダル獲得』を達成するためにも、今秋のワールドカップは重要な大会となる。ワールドカップは、9月22日～10月1日にオーストラリアのシドニーで開催されるが、10日間で最大8試合をこなすハードスケジュールとなる」と語った。そのうえで、「戦略とは、戦いを略くこと＝無用な戦いをしない」、「時間とエネルギーの効率的な使い方が必要」とし、「東京オリンピックで見せたキックアウトからの3ポイントは継続して、スイッチディフェンスを克服したい」と語り、さらに2月のFIBAワールドカップ予選を経て、「ローポストの攻防の部分で、特にディフェンスでは個人で守ることができませんでした。チームで守るだけでなく、より効果的に守り続けられるような戦術に取り組んでいます」という課題とともに、「オフェンスの原則に沿って『こういうときにはこうしよう』という即応する力を高めています。次から次にプレーを選択していけることが、一つ大きなポイントになります」とコメントした。

また、オーストラリア遠征（2勝1敗）を終えた時点では、「こういうときはこうしよう」と選手同士が判断し、流れるようなプレーを恩塚ヘッドは求めています。オーストラリア代表を相手に、目指してきたオフェンススタイルが見られた点については、次のように説明しています。

「今まではひとつの技術を深める、ひとつのセットプレーを深める、ひとつのフィニッシュを深めると、それぞれを深めていかなければいけなかったです。例えるならば、絵を細かく描いて行くような感じでした。しかし今、女子日本代表が目指すのは、フレームレートを増やすような感じです。

オフェンスのはじまりからフィニッシュまでの段階を踏んでいく中でさまざまな局面がありますが、その中に目的と原則を入れています。簡単に言えば、ボールマンがいつ攻めればよいか、ボールを持っていない選手は何をすればよいかなど、迷うシチュエーションに対して言語化し、みんなが共通のビジョンを持って動くバスケット手法に変えています。

この新しい試みに対し、最初はいつもと違うリズムだったために、選手たちも少し戸惑いがありました。それによって焦ってしまったり、味方の考えが分からなかったり、うまくいかなかったです。でも今回の遠征では、オフェンスでの局面の流れに対して、より動画が滑らかに再生されるようにフレームが増えたことで、選手たちはこのシーンだからこの動きをしようと考えて動くようになっています。絵の解像度を上げるのではなく、フレームレートを増やすような感じでバスケットを理解し、シンクロできる再現性を目指しています。」

次号に続きます。